
執事の旅？？？

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執事の旅???

【Nコード】

N9564Q

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

神様の手違いにより死亡してしまい、異世界へ特典つきで送られてしまう。小学生の頃の夢に執事と書いたのはいい思いであった。現世では無理だった異世界なら……。という発想で世界を駆ける。

第一

その一室には燕尾服を纏う黒髪黒眼の少年が笑顔で金髪蒼眼の少女背後に立っていた。

「お嬢様お茶です」

「ん」

「お嬢様お召し物が用意できました」

「ん」

「お嬢様少し髪が乱れております、髪をとかしますがよろしいでしょうか？」

「ん」

「では参りましょうか晚餐会へ」

「いつも思うのだが名前は何故教えてくれないのだ？」

「はい、真名は私が本当に仕えたい主にしか教える気がないので…
…すみません」

「まあ執事が優秀なのはいいことだ、いつかは執事の名前聞いてみたいな……」

少女は俯き、自身がソレに値しないことを理解していた。

だから悔しい。執事がこの家に来て早3ヶ月にもなる、それなのに
見せ掛けでしかない主従関係しか執事と少女の間に形成できていな
い。

私はその黒髪が好きだ……。

黒眼で見つめられたときには胸が高鳴る……。

いつも絶やさない笑顔は私の支えになってくれた……。

こんな女らしくなく、仏頂面しかしなかった私に笑顔をくれた。

だけどこれで最後になってしまふ……。3ヶ月の月日は早かった……
でももう終わり。

3ヶ月というのは、執事が仕えるべき人であるかを見定める期間で
もあつたのだ。

だからこの晩餐会が終われば執事はこの屋敷から出て行くだろう。

父上が止めても、母上が止めても、屋敷全員の人々が執事を止めても、
彼は行ってしまうだろう……。

本当に執事はこの屋敷に尽くしてきた。

私が誘拐されそうになったときは身を挺して助けてくれた。

母上が病気で死んでしまいそうになったときは、《奇跡》のような
力で助けくれた。

私がそれを問いただしても執事は笑いながら「お嬢様の執事ですから当たり前ですよ」

……そこまで言うなら真名を教えてくださいと思うのは私だけか？

いつも隣にいて私を支えてくれた執事を……わたしは

《愛している》

長々と思い出に浸っていると、執事は笑顔を絶やさず手を差し出した。
てきた。

「では参りましょう」

「ああ！」

涙を堪えたせいで微妙に声が大きくなってしまった。
執事に私の心境を知られたくない。

「愛しているぞ執事……（ボソツ）」

「ん？ なんですか？」

執事は首をかしげながら私に聞いてくる。

「なに気にするな……ただの戯言だよ」

第二

「そこまで好きなら押し倒して既成事実しか……!!」

「母上なに危ないこといつてるんですか!!?」

その一室にはベットに腰掛けている母親とその娘が言い争いをしている。

「やればできる子だよユミルは!」

「母上はそんな方でしたか?!」

そこには年の割にははしゃぐ母親とあきれ気味の娘がいた。

これは晩餐会の終了後母親が執事に二人だけにしてと言い、娘のユミルから執事を離し、今絶賛家族で会議をしている。

これもユミルの願いを……恋を成就させたいと思う親心であるためさらに手に負えない。

ユミルは嬉しい様な恥ずかしいような迷惑のような……という気分であつた。

「公爵家である私ことシルキー・アインス・ウィアム由緒正しい公爵家よ!」

「そういうことはもっと自重していただきたいのですが母上」

母親のテンションの影響で室内も暑くなってきたような気がしてきたユミルはテーブルの上に置いてあった紅茶で喉を潤すことにした。気のせいかだろうか体が熱くなってきたような……。

「ふふふ。そんな繊細で不器用で恥じらいのあるユミルちゃんには特別なお茶を用意させてもらいました！」

「母上……娘に対して媚薬とか正気ですか……？」

頬が火照り、額に汗をたらし息苦しそうにしているその姿は実に色気があり、足をふらつかせながら立っているのがやつのようだ。

「だってこうでもしないとヘタレのユミルちゃんは……ね？」

母親に同意を求められたユミルはその返事に母親を睨み返した。

体が火照り体が熱い……。息が苦しい……。誰かにこれを鎮めてもらいたい……。

とっさに思い浮かんだのは執事の顔であった。

「つつ！」

ユミルは扉に向かい外へ出て行ってしまった。

その頃執事は……。

「中国拳法も捨てがたいですが、やはり太極拳？ 間をとってウオ

ーリア&メイジにしますか？」

執事の神によって得られた特典は。

- 1・アリアンロッド能力値&スキル、変動可能
- 2・ナイトウィザード能力値&スキル、変動可能
- 3・不都合がないように補正

であった。

「《スマツシュ》《バツシュ》！！」

振り上げた剣は全長20メートルの大きな岩に吸い込まれるようにして接触。岩は粉々に吹き飛び軽く地面がえぐれてしまった。

「あちゃー、かなり手加減したんですけどまさか《スマツシュ》《バツシュ》だけでこの威力とは……」

アリアンロッドの能力値はすべて99というカンストまであげて実験してみたところ恐ろしい威力になってしうことが実証された。

こんなものを人間に使うとなると……身震いしてしまう。

「とりあえず、この陥没した地面をどうにかしませんと……《アー
スブレッド》」

そついうと土の塊が陥没した地面の穴に向かい、穴を埋めるかのようにして集まっていく。

攻撃魔法も応用次第ということがよくわかる光景だと私は思います。

ためしに一度人間魚てきな生き物に対し《ファイアボルト》を打つたら、こげる前に消滅しました。

……完璧までのoverkillだったようです……。

上級魔法を検証しようとした日には川が消滅しそうで恐ろしいです。なら能力を下げればいいと考えてしまいますが、もしお嬢様が危険な目にあってもすぐさま助け出せるようにと考えて能力値はすべてコストまでにいただいています。

別にヘタレじゃありませんよ……。

ピーキン！！

私の頭に電撃が走りました。

まあ……あくまで比喩表現ですが。

それよりもお嬢様の身に危険が迫っている！！ 急がなければ！！

「《ヘイスト》《トップスピード》！！ お嬢様今行きマース！！」

そして彼は光になった

第三（前書き）

スキルって説明要りますかね？

第三

アコライトのスキルである《ヘイスト》とで行動値を限界値まで高め、エクスプローラーの《トップスピード》により隙なく行動をすることにより彼は何よりも誰よりも速く駆けつけることができるのだ。

「見つけましたお嬢様！」

とつさに《エンサイクロペディア》を発動お嬢様の状態異常を確認。

名前 ユミル・アインス・ウィアム

種族 ヒューリン

クラス メイジ的なにか

lv1 HP10 MP30

筋力 5

器用 7

敏捷 5

知力 8

感知 7

精神 12

幸運 9

状態異常

魅了Great!!

お嬢様――！！

いったい私が離れている間にどうなされたのですかああー！！

状態異常を見てそう叫びたくなる衝動を抑え、私はお嬢様に向かって《キュア》をかけた。

《キュア》とはバッドステータスを…つまり悪い状態異常を一つ治すことができる魔術なのです。

世界が違えば規格外と言われるしなものの一つです。はい。

お嬢様の状態異常を治すとお嬢様はプツリと糸が切れた人形のようにならなくなった。

しかし、執事にも意地があり、スレスレのところで抱え込み、どうにか傷一つ付けずお嬢様を守った。

「執事私の物になれ……」

とつさに抱え込んだ体勢のままお嬢様は私に対してそういいました。私は0円スマイルを一層輝かせて

「却下です」

そして私はその晩屋敷を出て行った。

第四

「いやあ〜つつい条件反射で屋敷を飛び出してしまったので、次行くあてを考えてませんでした」

そこには燕尾服をぴつしりと着こなした少年がいた。

平原のど真ん中を平然と歩いているその姿は違和感バリバリであり、考えなしに出て行ったのがあだとなり途方もなく歩き続けている。

道中に巨大な弓を持った、骨の姿をした魔族に盛大に囲まれたり、はたまたデカイ魔剣を持った武人魔族などに遭遇し戦ったが……燕尾服に傷一つなく汚れもなく圧勝して見せた。

骨魔族は遠くからちまちま撃ち続けてきたので《リフレクション》（射撃攻撃反射）を使いながら殲滅していった。

デガイ魔剣を持った武人魔族に近づいて《バツシュ》（武器攻撃を行う場合）（S L）D 6 U p）《スマツシュ》（ダメージを+筋力）《クロススラツシュ》（2回攻撃）《ボルテクスアタック》（ダメージを+）（C L）D 6）という前衛スキルを組み合わせた見たら一瞬にして相手が細切れになっちゃったのは問題があったので今度から自重しようと思います。

あ、そうそうD 6というのは6面ダイス。S Lはスキルレベル。C Lはクラスレベルを指します。

なお私はステータスが限界値まで高まっているおかげか、全てのS LやC Lが99さらに2回以上使えないスキルなどは制限されておりません。おなじく言えるL Vまでし

かあげられないSLなども同じです。

人はこれをチートといいます。

こんなステータスなキャラが出てきたら確実にゲームになりませんからね（苦笑）

そんなこんなと説明口調の私は今野宿のためテントを張っています。周りのエネミー……つまるところ魔物にいちようは警戒しているのでもわりには《月衣》（別の結界を張ること）を使いエネミーに感知されないようにひそひそと行動しています。《月衣》は別の空間につなぐこともできるので物を運んだりするのに便利で私は愛用しています。

《月衣》からは屋敷の給料で買った調理器具を取り出し夕飯を調理しました。

しかし、異世界だけあって珍しい景色や珍しい???など、わくわくが止まらないのも事実です。

私はゆっくり旅をして……そして世界を見てみたい。元の世界と違ってこの世界には魔法も剣もなんと魔王も存在するのです。ですから私は世界を回り、旅をして、空を眺めて歩いていきたいと思います。

……ずっと……。

第五

私は身支度を整え、鏡の覗き込みでは笑顔の練習。

常に笑顔を絶やさず主のために尽くす、私はこんな執事にあこがれていました。

でも旅をしたいのも私の欲です。

だから私は決めました、理想とする主に仕えるため旅に出ると。

つまりところ主探しの旅なわけです。はい。

朝食をとった後は、テントを畳み《月衣》にしまい次の街を目指して歩き始めました。

特に理由などなく、ただ途方もない旅路です。

……ちよつと体が臭ってきたような気がするので《月衣》でそんな

常識 吹き飛ばしました。

なお、燕尾服は執事の命といえるべき象徴なので厳重に管理しています。

……しばらく歩いていると街が見えてきました。

「おまえどこの執事だよ……」

そうやってきたのは門番兵の人でした。中々に怪訝そうな表情だったので、きつと私を怪しい執事とでも考えているのでしょうか、どうかその誤解を解きたいので私は素性を話すことにしました。

「私は一人旅をする執事として、理想となる主を見つけるため旅をしております。この格好は執事であるものの証……常に私は着てお

ります」

「なんとまあ……トチ狂った執事もいたもんだな」

「光栄です」

「褒めてねえんだが……。まあ別にここはそこまで嚴重じゃねえよ。どうぞ《ジッス》へ貴行を歓迎しよう」

そして私はその街へ足を踏み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9564q/>

執事の旅???

2011年2月27日19時50分発行